

北白川廃寺発掘調査現地説明会資料

令和6年4月29日

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

所在地：京都市左京区北白川東瀬ノ内町 10-1

調査原因：個人住宅建設

調査期間：令和6年4月8日～5月17日（予定）

調査面積：約 115㎡

1 はじめに

京都市文化財保護課では、個人住宅建設計画に伴い、令和6年4月8日から発掘調査を実施しています。調査対象は飛鳥時代（約 1400 年前）から平安時代（約 1200 年前）の寺院跡である北白川廃寺、縄文時代の集落跡である上終町遺跡です。北白川廃寺は昭和9年（1934）に区画整理事業に伴って発見された寺院跡です。京都大学考古学教室の助教授、梅原末治らが発掘調査をおこない、瓦積の基壇（建物の土台となる土壇）が見つかりました。この時に見つかった基壇の一部は京都大学構内に移築復元され、誰でも見ることができます（写真1）。この基壇に建った建物は金堂（本堂）だと考えられています。金堂とするとその基壇の大きさは奈良の吉備池廃寺には劣るものの、飛鳥寺や本薬師寺など、並みいる大寺院を凌駕しており、同時代の寺院でも屈指の規模です。その後の発掘調査で、金堂は回廊に囲まれていたことが分かっています。

金堂から 80 m 西の地点で、昭和 50 年に塔の跡が見つかりました。平成7年には塔の基壇と心礎（中心の礎石）を良好な状態で確認しています（写真2）。塔の基壇は当初瓦積であったものが、平安時代前期に石積へと造り替えられていることも分かっています。塔の北側では、東西方向の溝と柵列が見つかっており、塔は塀によって囲まれていたと考えられてきました。

今回の発掘調査は塔跡の真西に位置し、北白川廃寺の推定範囲の西端にも当たります。これまで、北白川廃寺の西端で発掘調査をおこなったことはなく、西端に関連する発見を期待して調査を開始しました。

2 調査について

今回の発掘調査では南北方向の溝跡2本と南北方向の建物跡、柱穴列が見つかりました（図2）。

溝跡 南北方向の溝跡2本のうち、東側に位置する溝（SD2）は最大幅 2.4 m で、中に入ると人の胸ほどの深さになります。古代寺院の溝としては非常に深く、その理由については検討中ですが、北白川廃寺にふさわしい規模といえます。溝からは多くの瓦が出土しています。出土した遺物のうち、最も新しいものは平安時代初期ごろの土師器（素焼きの土器）であるため、この頃まで溝が機能していたと言えます。西側に位置する溝（SD3）は、SD2 以上に多くの瓦が入っています。説明会時点では瓦が埋まった状況を残しており、出土遺物から時期の検討ができていませんが、SD2 よりも古い時期の溝であると推定しています。幅や深さについては、これからの調査によって確認します。いずれも北白川廃寺の西端を画する溝と考えています。

建物跡 調査範囲内で東西に柱3基（柱間2間）、南北に柱5基（柱間4間）の建物跡を確認しました。柱間は 2.2 m ～ 2.4 m でほぼ等間隔です。東側、南北両側はいずれも調査範囲外となるため、これ以上の規模になる可能性があります。ただし、建物の外側だけでなく、内側にも全て柱がある構造の建物（総柱建物）であることには注意が必要です。総柱建物は多くの物を入れても重さに耐えられるために、その役割を倉庫と考えることが多いのですが、これまで分かっている古代寺院の建物配置から、西端に倉庫を建てる可能性

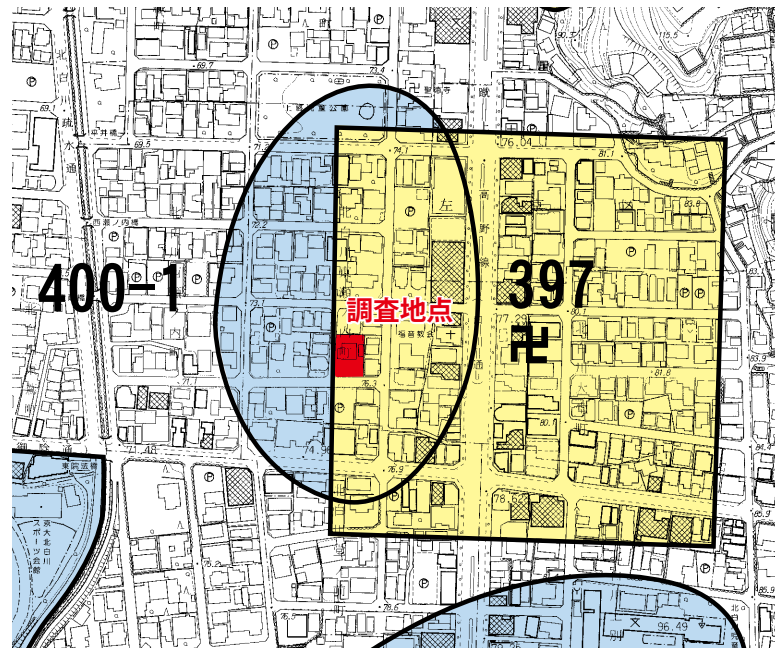


図1 調査地位置図（1：5,000）
397：北白川廃寺、400-1：上終町遺跡



写真1 京都大学構内に移築された瓦積基壇



写真2 平成7年に見つかった塔跡基壇

は高くありません。そのほかの可能性として屋根を持ち、重要な建物を取り囲んだ廊下、すなわち回廊があります。「はじめに」で書いたように、これまでの調査では金堂では回廊が見つかったものの、塔の周りでは回廊が見つかっていません。また、塔を取り囲むと考えるには、東西方向に長く、バランスが悪くなることや掘立柱建物であることに疑問が残ります。仮に塔を囲む建物とすると、塔を中心にして反転させることで、塔を囲んだ領域（塔院）を復元することができます（図3）。また、これまでに塔の東側で見つかった南北溝を塔院の東ラインとすると今回の調査区はその外側となり、僧侶が居住するための施設（僧坊）などの可能性も出てきます。現時点では、回廊案を第一候補として調査を進めていきます。

柱列 建物跡と重複する位置で南北方向の柱列を確認しています。建物跡との造り替えがあったと考えられます。現時点では掘削していないため、詳細は今後調査していきます。

出土遺物 溝から多くの瓦が出土しています。瓦を作る際には、板で叩いて形を作っていきますが、北白川廃寺からは叩きに伴う多種多様な模様の付いた瓦が出土します。この模様の豊かさは北白川廃寺に特徴的です。その意味は分かっていますが、古代の瓦作り職人がどのような思いでこの模様をつけたのか興味が尽きません。また、墨で文字を書いた土器（須恵器）も出土しています（写真4）。今後、出土遺物はきれいに洗浄し、より詳細に調べていきます。

3 今回の調査成果について

今回の発掘調査では、北白川廃寺の西を区画すると考えられる南北溝を確認しました。初めて北白川廃寺の西端を確認できたことで、寺域復元のための大きな手がかりを得ました。また、その東側に建物跡を確認したことで、塔周辺の施設の解明も大きく前進しました。

北白川にはかつて国内でも有数の規模のお寺がありました。早くに市街地となったことで、発掘調査をおこなう機会は限られていますが、徐々にその全容が分かりつつあります。今後の調査で、さらにその姿が明らかになっていくことにご期待ください。

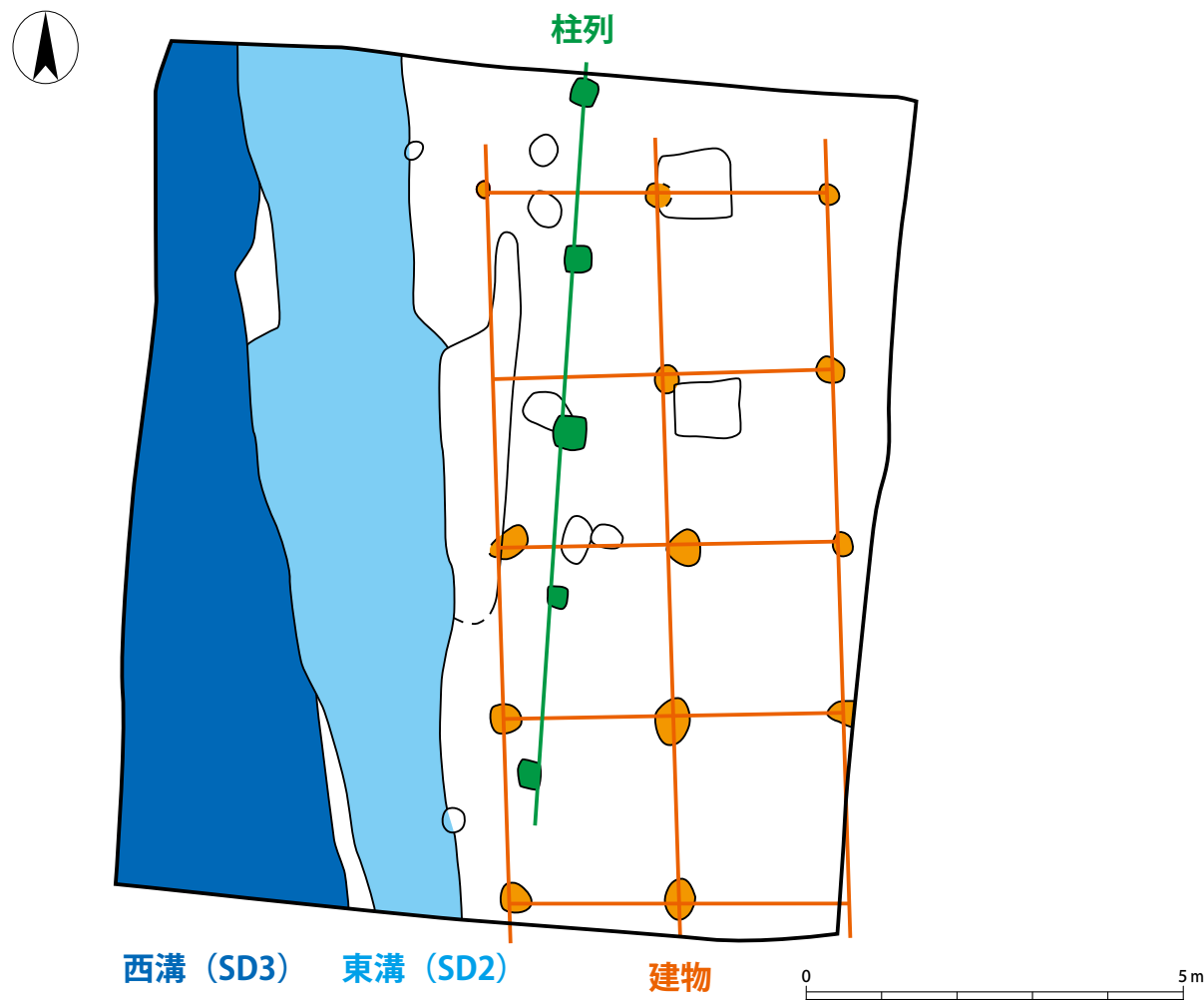


図2 今回の発掘調査で見つかった遺構 (1:100)



写真3 今回の発掘調査区全景写真 (南から)

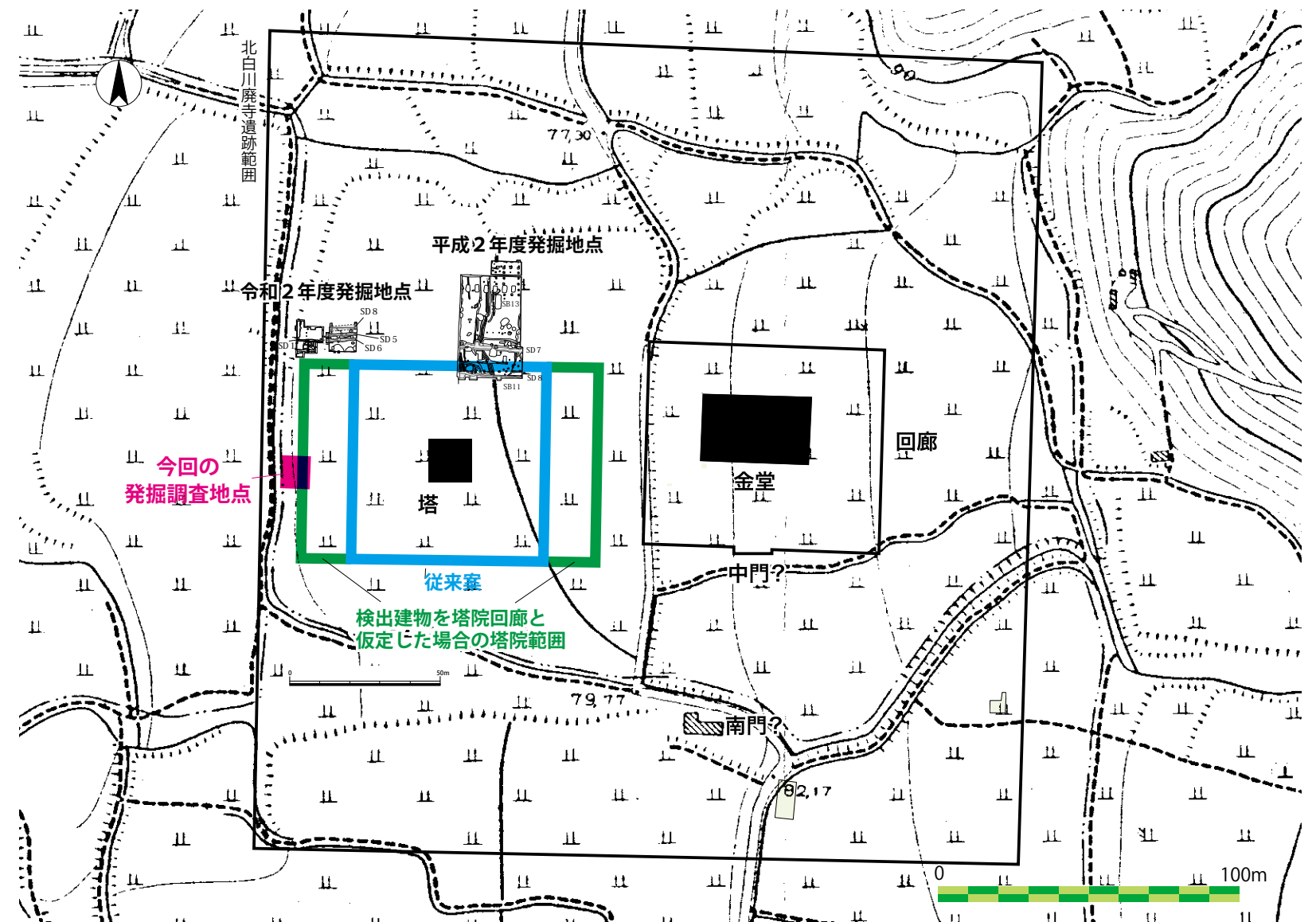


図3 大正11年都市計画図と北白川廃寺 (1:2,000)

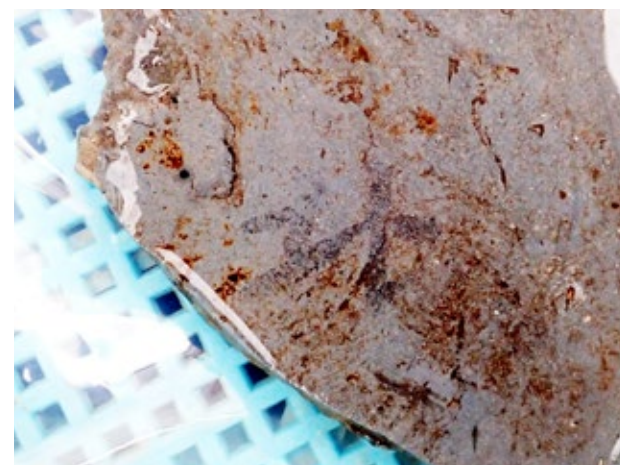


写真4 今回の見つかった墨書土器



写真5 今回の見つかった瓦1



写真6 今回の見つかった瓦2